

もくじ

葛西城攻略の論功行賞 -牛込家と足立- … P1 大久保家資料の紹介②紙屋の地漉紙問屋株 その1 … P2 お化け煙突 60年①発電停止 … P3

足立史談

第661号

2023年3月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

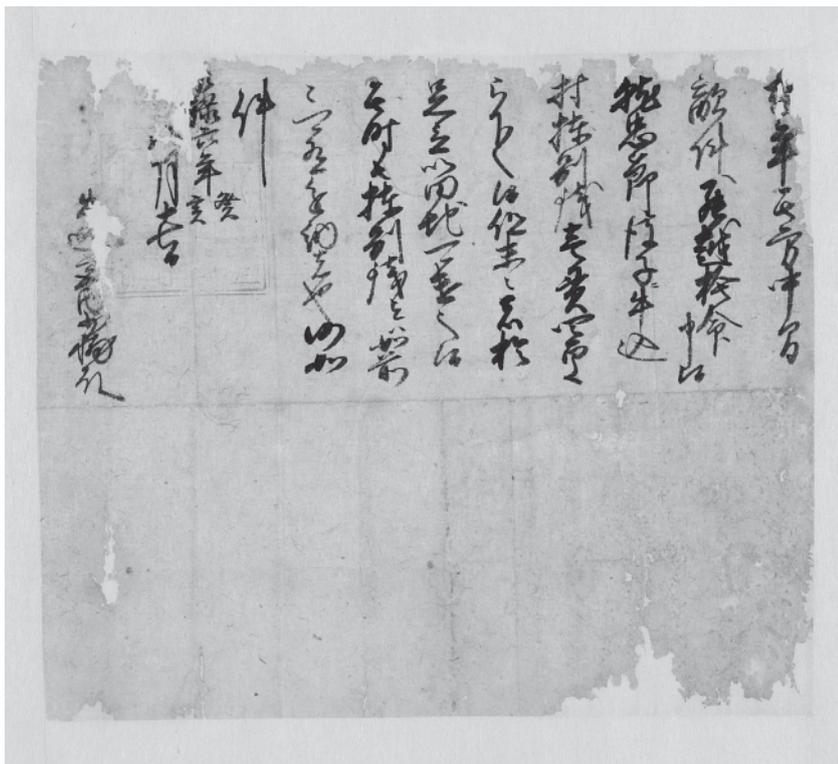
東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

葛西城攻略の論功行賞 -牛込家と足立-

日比谷 孟俊



(図1) 葛西城攻略に関する牛込文書 永禄6年(1563)8月17日発給 江戸氏牛込氏文書 個人蔵 画像は武蔵野ふるさと歴史館提供

■忍びが活躍した葛西城 多くの足立区民が通勤通学で利用する、常磐線亀有駅から南に約一・五キロメートルの葛飾区青戸に、環状七号線の左右を挟んで小さな公園がある。東側が葛西城址公園、西側が御殿山公園と呼ばれている。今から四百六十年前の戦国時代に越後の上杉氏・房総の里見氏の連合勢力と小田原の北条氏とがせめぎあう最前線にあった葛西城の址である。

四年前の足立区立郷土博物館での企画展「戦国足立の三国志」展では、永禄五年(一五六二年)の葛西城乗っ取りに際して、忍びを使って成功した本田氏に関する古文書が展示されていた。展示文書の中に、翌年の永禄六年(一五六三)八月十二日に、

北条家朱印状

去年其方中間

敵陣へ罷越、捨命申候、

就忠節被予二牛込

村棟別銭壹貫四百文

被下之候、但末々者於

足立以田地可遣之候、

其時者棟別銭を如前

々可有進者也、仍如

件、

永禄六年 癸

八月十七日

牛込宮内少輔殿

小田原の北条氏が発給した「昨年の戦いについて報告するように」との文書があった。

■牛込文書 ところで、昨年十月から十二月にかけて、武蔵野ふるさと歴史館で「江戸氏牛込氏文書」という展覧会が開催された。葛西城攻略戦に関係する文書も展示され、戦国時代の牛込氏と足立の地との係わりを示すものとして興味深い。

牛込文書は正確には『江戸氏牛込氏文書』であり(以降牛込文書と表記)、江戸牛込の地を所領とした江戸氏の文書七通を含む、牛込氏に伝わった二十一通の文書である。最も古いものは、足利義詮の命を奉じて北畠顕家を追放して関東を平定した足利幕府の執事高師冬が、戦功のあった江戸近江権守に牛込郷の支配を認めた暦応三年(一三四〇)の文書である。ほかにも足利持氏からの感状や、古河公方との贈答の礼状などが含まれる。牛込氏が直接関わる文書は、後北条氏が江戸を押さえた以降の文書である。

■小田原衆所領役帳 小田原の北条氏が開東を支配していた時代の一次史料として、永禄二年(一五五九)の「小田原衆所領役帳」(以降「所領役帳」とする)がある。江戸衆としての牛込氏(大胡氏)が記録されている。牛込城を拠点とし、牛込、比谷本郷および堀切の三か所、都合貫高百七十七貫二百十文の所領を有し

ていた。牛込氏は北条氏に家臣として仕えることにより本領を安堵され、その見返りに戦時には寄子のいる所領から、その貫高に応じて戦闘要員、陣夫と呼ばれる輜重、および小屋夫と呼ばれる工兵を徴発することが義務づけられていた。牛込氏以外に比々谷および堀切を名字にする地侍がいたことが想像できる。

「戦国足立の三国志」展に展示された元龜三年(一五七二)の北条家印判状によれば、北条氏は宮城氏の貫高二百八十四貫四百文に対して三十六人の軍役を課していたことが明らかである。牛込氏の場合「所領役帳」に記載の貫高百七十七貫二百十文を参考に、貫高に応じた軍役を推定すると二十二名となる。貫高の内訳で案分すると、牛込、比々谷本郷および堀切からそれぞれ、八、八および六名ずつと推測される。牛込、比々谷、堀切氏は馬上であり、その他は歩兵として鉄砲、弓矢、旗などを担ったと想像される。

■牛込氏宛北條家朱印状 「江戸氏牛込氏文書」展に展示の十四番文書(図一)は、北条氏が発給した本田家文書から五日後の永祿六年八月十七日に、牛込宮内少輔にあてたものである。現代文にすると、「去年、あなたの部下が敵との戦いでが命を捨てた。その忠節に対し、部下の子に牛込村の棟別銭(税金)一貫四百文を下げ渡す。ただし将来は、足立の田地を

遣わす。その時は棟別銭(税金)を前々のように納めるように」となる。わずかに五日違いの文書ということから、本田家文書および牛込文書のいずれもが、前年の葛西城攻略戦における論功行賞に関わるものであることが明らかである。この時代の論功行賞は従軍した武士たちが、新に土地を与えられるべく、戦死、負傷なども含めて手柄を主張した。「戦国足立の三国志」展に展示されていた複数の本田家文書からも、そのことが窺える。戦死した牛込氏の部下が誰なのかは知るよしもない。

■小田原開城後の牛込、日比谷、堀切氏 天正十八年(一五九〇)に小田原が陥落する前の四月に牛込氏は降伏し、翌年には徳川氏の家臣となった。文祿の役(一五九二〜一五九三年)、慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の戦いおよび慶長十九年から二十年(二一四〜一六一九)の大坂の陣に供奉している。これらには比々谷(日比谷)氏および堀切氏も動員されたと考えてよい。

牛込氏の所領であった比々谷(日比谷)郷は、長祿や文明年間(一四五七から一四八六年頃)の地図によれば、今日、日比谷と称せられる場所よりも広く、外堀川と古川に挟まれた地域の北半分も比々谷と呼ばれていた。この地名を名字にしていた日比谷氏がいたことになる。後の寛永時代

(一六四〇年代)の地図によれば、日比谷郷の全てが徳川家臣団の屋敷となっており、日比谷氏はこの地を明け渡して足立淵江に入植したことが分かる。

日比谷小左衛門は、『小右衛門稲荷縁起』にあるように、渡辺小右衛門らと、元和二年十二月(一六一七年一月)に小右衛門新田(足立区)の開発に従事する。同様に堀切には堀切氏がおり、二郷半領の彦成に入植した。いずれも低湿地帯であり、感潮河川の影響を受ける土地である。開墾に苦労したことは想像に難くない。

日比谷氏や堀切氏のような江戸東郊での新田開発は、幕府の土木官僚伊奈氏発給の開発手形によるものと考えられる。主家を失い牢(浪)人となり、一族を連れて移住し新田開発に従事した。食料増産と北方の伊達への守りを任務とする、いわば屯田兵であった。

■牛込氏の場合 では、徳川氏の家臣になった牛込氏はどうしたのであろうか。牛込勝重は牛込城を開城し徳川の家臣となり。子の俊重は大坂の陣に供奉した。俊重の子三右衛門重恣(しげのり)は寛文十一年(一六七二)と延宝三年(一六七五)の二度にわたって長崎奉行に任じられている。このことから、牛込氏自身は牢人として新田開発に従事する必然性がない。であるならば、現在、足立区にお住まいの牛込

家の人々は、どういふ縁で足立におられるのか。

本稿で紹介した牛込文書にヒントがあると考える。永祿五年(一五六二)の葛西城攻略戦の論功行賞として「足立に土地を遣わす」とある。新宿区郷土研究会が昭和六十二年に刊行した『牛込氏と牛込城』によれば、「牛込氏の家は旧領堀切、足立区の栗原、島根に多く、徳川幕府は堀切領を栗原、島根に分け、分家二家を名字帯刀ご免の大庄屋に取り立てた」とある。この記述は、地元での言い伝えを記録したものであるが、牛込文書記述の「足立に田地を遣わす」に関連するものと考えられると、葛西城攻略の功績によって足立に土地を与えられて入った、牛込氏の分家の人たちではなかっただろうか。当時の「足立」を示す地域は、現在の足立区と同地域ではないことは承知の上であるが、関連付けて考えてみたい。

足立区にお住まいの牛込家には、永祿七年(一五六四)正月の第二次国府台合戦において、手柄を立てたと伝承されている。だとすれば、『牛込氏と牛込城』が説くよりも早い時期に足立に入ったものと想像される。

「堀切領」という領は確認されておらず、『牛込氏と牛込城』では堀切にあった領地という意味で使用されている語句と思われる。

(実践女子大学文芸資料研究所)

大久保家資料の紹介② 紙屋の地漉紙問屋株 その1

郷土博物館

千住四丁目の紙屋伊助にかかわる大久保家文書の一つ「千住四丁目起立之事」の中には生業である地漉紙問屋の成り立ちについて、「実父伊助より申し伝え書の覚」という項目を設け、初代伊助からの伝えを載せています。

■貴重な地漉紙問屋の成立の記録 現在、千住宿の伝統的な商家建築として知られる松屋、横山家も地漉紙問屋です。江戸時代後期の千住宿では代表的な産業の一つとなっていました。

地漉紙問屋とは地漉紙というリサイクルペーパーの問屋制家内工業を営む商家です。元々、江戸で盛んだった業種ですが、徐々に千住宿で多くの地漉紙問屋が繁栄しました。しかし江戸の産業がどのように千住宿にもたらされたのかという、成立経過を記した古文書は見出されていませんでした。そこで貴重な本記録を紹介します。

■初代伊助、江戸の紙屋に奉公 天明二（一七八二）年、千住四丁目の伊助は、千住四丁目の親元から江戸本所松坂町一丁目の紙屋（大（屋号、やまだい）弥兵衛のところ）に奉公に出ました。伊助は出世して「見勢」（店）の支配役となりました。

伊助には、実の姉、「かん」が千住宿にいて長四郎と結婚し、五人の子どもがいました。しかし寛政七（二七九五）年、義兄の長四郎が亡くなります。姉かんと子供は、かんと伊助の両親が面倒を見ていたのですが、二年後に母親が病死してしまいます。

■千住宿に呼び戻される 姉の家が立ち行かなくなることを心配した親戚一同が相談し、伊助を千住宿に戻すよう主人、大（本店に願いました。しかし支配人という要職であり、願いから半年が過ぎた寛政九（一七九七）年八月に、千住宿へ戻り姉やその子供たちの面倒を見ることができるとなりました。

■地漉紙問屋株の取得へ 伊助は、その後、寛政十二（一八〇〇）年に千住河原町の佐野屋が持っていた地漉紙問屋株（＝営業権）を取得し、営業を始めます。江戸の本所でノウハウを知悉した伊助が、千住宿で紙屋を立ち上げたのです。この問屋株や地漉紙問屋の動向は次号でご紹介します。

* * *
長文ですが、記録の意味も含めて、
ここで関係部分を掲載します。

実父伊助より申伝書の覚

一、千住四丁目百姓長兵衛四代目倅伊助義、本所松坂町壹丁目紙屋にて、大弥兵衛殿へ天明二壬寅年二月奉公ニ差遣し置き、当時、見勢支配役あい勤めまかりあり候所、同人実姉加ん夫長四郎義は、子供五人有候処、寛政七乙卯年、八月廿九日、右長四郎病死仕候二付、両親にて後家かん並びに子供五人を見立世話いたし居候処、寛政九丁巳年、正月廿四日猶又母親病死仕候二付、親類一同相談之上、弟伊助義を引戻したく、大本店表へ暇願申出候えども、主人方においても当時支配人之事ゆえ差当り難洪之趣被申御聞入無之候二付、

老衰之父親、並びに後家にて子供五人これ有り、誠二日々之暮し方にも差し支え候趣、再応相敷御暇申受たき旨申入候所、聞済にあいなり、同年八月御暇にあいなり、首尾よく宿元へ引取り、かん弟伊助ヲ以て相続人にあい定む。

なおその後、諸親類納得之上、寛政十二庚申年六月中別宅いたし候て、同七月川原町（千住河原町）佐野屋善六所持まかりあり候、地漉紙元方問屋株、我等方へ譲り受、地漉紙商売、あい始め候：略：

※翻刻＝郷土博物館専門員山崎尚之。
一部読みやすいように改変しています。
（学芸員 多田文夫）



紙屋伊助（初代）の奉公先と実家

伊助が支配役となった紙屋弥兵衛は両国橋の西、現在の国技館の南側にあった。「嘉永改正 府郷御江戸絵図」（当館蔵、掲載は部分）に加筆して作成。

お化け煙突60年① 発電停止

■火力発電所のお化け煙突 「お化け煙突」として知られる千住火力発電所は、東京電燈株式会社の千住火力発電所として建設され、大正十五年（一九二六）に発電を開始しました。戦後の電気事業再編成により（新）東京電力株式会社の千住火力発電所となりました。

見る角度によって煙突の本数が一本から四本へと変わって見えること、周囲に高い建物がなかったことと相まって、地域のランドマークとして親しまれてきました。この煙突は、昭和三九年（一九六四）に解体されます。

■発電停止日 解体に先立って、発電を停止したのが、前年の昭和三十八年三月二十二日、金曜日のことでした。昭和三十六年四月に入社して千住火力発電所に配属され、郷土博物館に貴重な発電所資料をご寄贈くださった元社員の格和宏典さん（昭和一七年生）によると、「最後の発電停止が昭和三十八年三月三十一日と勘違いした人々や書物も数多くある」とのことですが、正しくは、この日付けだそう。格和さんによると以下の流れになり、昭和三十八年から三十九年の解体に向けて粛々と進められていた様子が見えがええ。

- 休止発表 昭和38年2月25日
- 発電停止 3月22日
- 運転休止 4月1日
- 解散式 5月7日
- 国の認可 昭和39年2月29日

格和さんは、解散式が行われた5月7日に千葉火力発電所に異動が発令されており、まさに、稼働している「お化け煙突」の最後を目にされた方です。

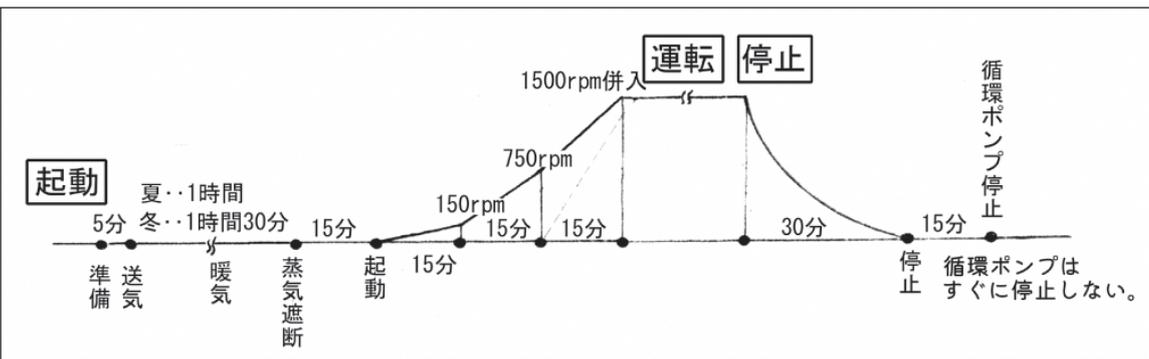
■停止までの様子 格和さんが入社配属された昭和三十六年四月には、煙突から煙が上がり、盛んに操業していました。冬に向かう頃には操業停止となり、（再稼働はなく、このまま廃止だろう）と誰もが思っていたそうです。

各地に新しい発電所が建設されていくなかで、老朽化した千住火力発電所の廃止については社員が納得する状況にあったことがうかがえます。ところが翌年四月に、新入社員が配属され、研修を半年間行うことになりました。発電機の運転実習ができないままでは、何のための配属なのかということとなり、本社との協議により、夏季対策の名目で、七月に入って運転を再開し、発電停止の三月二二日まで

操作したとのこと。 ■発電停止時間 格和さんによると、『千住火力発電所報29号』には、発電所長の記憶として「午後一〇時近くに凡てのボイラーは消火され…」とありますが、最後の運転を経験された萩野博章さんの交代勤務状況から、二一時前に徐々にボイラーを止めて蒸気量を減らすとともに、発電量を減じていき、二二時ごろに発電停止とするという停止方法だっただろうということ。翌日ボイラーを動かす場合は、「埋火（まいか）」といって、送風を遮断し石炭を山状に掻き集めておきますが、休止が前提のため、このときは、すべての石炭を燃焼させ、地下に落としてしまいました。炉内は真っ暗になりました。ボイラー終焉の瞬間となります。発電は停止しても、発電機やタービン自体は三〇分ほど空転し、また、停止後に、循環ポンプ等も停止するので、二二時近くに機器の動きがすべてつまり静寂となるということです。

機器自体は動いていますが、空転しているだけで、「発電の停止」は厳密に言うと二二時（午後九時）ごろであったらという事です。 60年前のちょうどこの三月に、千住火力発電所は発電を停止したのです。

*格和さんの御著書『お化け煙突のせかい思い出すままに』平成二八年・



汽缶（タービン）運転に関する諸時間・回転数
発電を停止してもしばらく機器が動く様子がわかります。
『続 お化け煙突のせかい 思い出すままに』格和宏典氏 より加筆修正

『続 お化け煙突のせかい思い出すままに』平成三〇年と、お手紙から原稿を作成しました。
(郷土博物館)